

最小単位としての暖かい家庭、母親力

田村 千尋

§ 0 表題の意味する温かい家庭と母親力

最小単位という堅い表現から「暖かい」という、ふんわりとした形容詞で包んだ「家庭」、今度は母親に「力」を加えテヌートぎみ、その意味する所は何か、田村明の「22世紀論」に次の一節がある。

2009/5/20

東京のまちづくり 22世紀論から
家庭と母親力と学校

戦前は、他人への配慮は当然のこととして身をもって教える母親がいた。貧しい子沢山の生活の中でも、愛情をもって家庭を円滑にまとめる母親力が、見えない大きな社会資本だった。戦前のイエ制度という束縛の中では、母親は市民を育てるといふことまでは出来なかったが、社会に通用するココロある人間を育てた。

ところが戦後は民主主義の時代になって、ハードの社会資本を整備しても、目に見えない母親力という社会資本は失われた。自分の子供だけがよければという、利己心を増幅させている母親が多い。これでは市民はおろか、人間が育たない。都市の時代になった今日、地域に市民が協働して住む連帯意識を育てなければならないのに、事態は全く逆に進行してきた。本来の母親力を再建しなければならない。それにも母親力が中心になる。家がただのネグラに化してしたことを、ドラマなどで冷やかしたり笑いの種にしておくことではすまない。個人一家庭（母親）一向こう三軒両隣一地区一自治体（市民の政府）というつながりを構築しなおさなければならない。

学校での市民教育は必要だが、戦前のような上からの押し付け教育ではなく、自分自身の問題として考えさせることが必要だ。身近な環境を幅広く捉えれば、地域、自然、市民といったものが必然的に取り上げられることになる。

戦前の社会は、他人への配慮が社会資本であり母親はその推進役であった。民主主義になって個の尊厳を重視した結果、母親は利己心の目覚め、増幅し、協働と連帯という意識を歪曲化した。問題を解決するには本来の母親力を自発的に再建する事だとした。田村明の周辺を見渡し、問題点の原点を見よう。

§ 1 父、幸太郎が歩んだ人生、

- 1) 新潟県村上町、父の父は宮大工、作業中の転落事故で急逝、父は床屋の梅津家に養子として出生届け出
- 2) 財政豊かで旧制中学へ、両親の離婚と養父との対立で田村姓、天涯孤独。村上キリスト教会を訪れる。
- 3) 教会に幸太郎の理解者、紅松夫妻が現れ、後、招かれて上海で生活、先輩の妻(愛)が暴徒に襲われそれを救助
- 4) 帰国後、愛の両親に報告、愛の妹、忠子の存在を知る。キリスト教ホームに憧れ、忠子への接近
- 5) 内村鑑三の講演会にうたれ、無教会主義へ傾倒、NCR への就職、忠子と結婚達成。「戦争」と「平和」

§ 2 母、忠子が歩んだ人生、

- 1) 誕生は福島県相馬中村、東北開拓伝道師の五女、キリスト教弾圧、投石と虐め、絵画と音楽に没頭
- 2) 音楽に強い憧れ、スポンサーを得て上野の音大へ、スポンサーが事業に失敗、退学を余儀なくさせられた。
- 3) ある御曹司との婚約と急病別離、田村幸太郎との結婚、4男をもうける。大恐慌、第二次大戦、不安定家計
- 4) 青山学院緑岡幼稚園の先生、進駐軍のメイドリーダー、草月流の先生、訪米、1950 後半は世界各地へ旅行
- 5) 幸太郎の死と絵画への再挑戦、子供家族を集めて月一度の聖書研究会「祈り」と「平和」な晩年を過ごす

§ 3 長兄、忠幸が歩んだ人生、

- 1) 名前の忠幸は幸太郎、忠子から一字ずつ受けた、両親に対して所謂、よい子であろうとし順応型であった。
- 2) 青山師範附属小学校、そして麻布中学校へ、忠幸は青山学院、下の弟二人、明、千尋を相手によく遊んだ
- 3) 青山学院商学部卒業、日本光学に入社するも動員で近衛第二師団（北の丸公園）に徴兵
- 4) スマトラのメダンに派兵、奇跡的に銃を一度も使わず戦争終了、最も平和な時を過ごした。9ヶ月後帰国、
- 5) 大映映画会社勤務、フィルム配給、好景気に株売買で財。後、荏原ユージーライトの創設に寄与、役員へ

§ 4 次兄、義也が歩んだ人生、

- 1) 義也は旧約聖書のヨシュアから、両親に抵抗型、兄弟にたいし独立型、千尋には屢々接近してくれた
- 2) 青山師範附属小学校、そして麻布中学校、義也は慶応大学経済学部へ、入学と同時に学徒動員令
- 3) 徴兵後、義也は幹部候補生を選び軍人に、特殊潜行艇要員へ、潜行艇製造が製造不能で終戦、死線を越えた。
- 4) 義也は岩波書店、「世界、文学」の編集長へ、三島事件黙殺、大内兵衛事件の廃刊、謝罪と岩波内での硬派

5) 定年後、本の装丁家になり内容に即した装丁法に腐心、1400冊ほどを手がけた。後半は明、千尋と会話

§ 5 3人目の兄、明が歩んだ人生、

- 1) 幼少期に大恐慌、経済的圧迫に呻く母親の行動観察、二人の兄の比較、自己アピール
- 2) 第二次大戦では死を賛美する脅迫、都立一中、三年の時病気休学、静高から東大建築、法学部へ
- 3) 結婚と不妊宣告との自覚、日生での職業の中に自己実現は無く、改めてライフワークを求め東京圏へ
- 4) 父親の死に「もう5年生きていて欲しかった」、母親の死を受けて妻の前で「天涯孤独」を口にした
- 5) 横浜市での中央、及び地方都市官僚との闘い、彼が描くユートピアとしての市民政府論の展開

§ 6 従姉妹、シンが歩んだ人生、二人の母

- 1) 田村シン、父方の従姉妹、小学校卒業後、新潟で女工、15才、お手伝いさんの形、耳が遠く不遇
- 2) 千尋の誕生で乳離れ後は乳母のような存在、まかない、を通じて終生、田村家に貢献、
- 3) 戦前、戦中、戦後の数年と最も厳しい時代、会話の少ない時間を共に過ごした、思い出は涙である。
- 4) 母、忠子はシンと忠幸の孫、麻美子の3人暮らしで平和で平穏な約10年をすごした。
- 5) 縁遠く未婚のまま、田村家に尽くし生涯を終えた。

§ 7 千尋が歩んだ人生、

- 1) 母は資格取得のため保母養成所に学び不在、千尋は16才になったばかりのシンに育てられた。
 - 2) 戦後、両親の失業と成長期の空腹、栄養失調による虚脱的日常、明兄との比較に苛まれ、勉学拒否
 - 3) 大好きな伯母の一言から勉学へ邁進、都立大、父親の紹介で三共、中央研究所へ、結婚と留学
 - 4) 強い母と弱い母の狭間、認識、厳しさと優しさ、ふぐ毒の構造決定、権力と権威の実体の認識
 - 5) 研究の面白さ、プログラミングから抽象画、社会学、人間関係の勉強、生きることの意味
- 田村明の思う「暖かい家庭」の原型は「柿の実る家の昭和史、東京っ子の原風景」の一文に見る。

柿木坂と言う地名にちなんで、家を建ててから庭に柿の木を二本植えた。富有柿と次郎柿だが、富有柿は一年おきにたくさんの実をつけた。ごくアッサリした富有柿の味が、秋の楽しみだった。赤い実には、何か暖かいものが感じられる。このとき幸太郎はちょうど数え年で五十歳だが、村上から出てきて、最も充実した日々だっただろう。忠子のほうも青山学院の幼稚園が軌道に乗り出し、これもまた充実していた。ようやくここに妻と四人の息子とシンちゃんの七人家族の家が定着した。イギリスの桂冠詩人ロバート・ブラウンニングの『われらは七人』という詩を皆によく読んで聞かせた。泥沼のシナ事変はあったが、まだ世の中も平和で、我が家も最も平和な時期だった。

§ 8 自然界にある約束事と人間界にある約束事

- 1) 水と油はまざらない。砂糖や塩は水に溶けるが油には溶けない。
- 2) 水は100度で沸騰し気体になり、0度で固体、結晶になる。
- 3) 原子の存在、分子認識、そして細胞の発見
- 4) アミノ酸と核酸の相互作用から生命現象へ、その継続が目的化した。
- 5) ヒトは生命体の完成型か

----- *

§ § 0~7の内容をふまえて

この章の大テーマは「都市に住む」その中で「暖かい家庭、母親力」と可成り抽象度の高い設定の一項である。田村明は22世紀論を記してから一ヶ月後、2009.10.21、既に重症の状態だったが表題に「母親力とまちづくり」

「まちづくり」とものづくりだけではない。そこに住む人々の暮らしが安全で継続的によりよい豊かさに向かっているかどうか重要である

と書き始め、その一行で力尽きて筆を止めてしまっているのを見つけた。文の前に「母親力」後に「まちづくり」という位置関係は、なにか強い「母親力」への思いがあって書き始めたのだろう。彼自身が「まちづくり」は何と言ってもヒトであると、一貫して強調してきた。一方、「22世紀論」で述べているのは過去に自分が見ていた社会でマチの外れに「愛情をもって家庭を円滑にまとめる」と、「母親力」を社会資本として評価しながら、あのイエ制度の時代、市民を育てることは出来なかったが「社会に通用するココロある人間を育てていた」とその

表現は殆ど礼賛に近い。現今の社会は、民主主義と言うよりは個人主義に変容し、社会構成の基本的人間関係が崩壊していると弾劾、文章はここで一足飛びに「母親力」による復権を願い求めているのである。しかし、ここで、その具体的な解決策はなく、連帯感をどの様に育てるべきかも言及していない。

田村明のエッセーにもう一つ、ワイキキビーチでの出来事の一節がある。彼が旅先で一つの出来事を感じて捉えた話、「躰けの良い家庭に育った幼児」、「暖かい家庭」のイメージでもある。幼い頃の躰けが長じて良き市民への糸口と捉えた。とりわけ風に飛ばされるゴミを最後まで追いかけた幼い子の姿に詩情を呼び、微笑ましいさと責任感をダブらせた。対比的に日本の子供達の育て方に危機感を感じ、そのまま「22世紀論」にも繋がる。

強風の翌日の午前是人影も少ない。この安全な浜辺に母親と子供二人、それにお爺さんの四人づれが遊んでいた。こどもたちは上がやっと小学校に上がり、下はまだ学齡前という感じだ。お爺さんは海に入っているが、母親は砂浜でひなたぼっこ、そのそばで二人の子供は砂を掘ったりして遊んでいた。暫くして、お爺さんがこどもを呼びに来た。海に入って子供の立えないようなところで水泳の訓練。一家団欒のほほえましい風景だ。こども浜に上がって来て、赤い銀紙のキャンディを食べている。水泳で疲れたのだろう。見ていると、突然に小さいほうの子がこちらに向かって走りだした。

何事かと思ったら、キャンディを剥いた銀紙が風に飛ばされたのを追ってきたのだ。昨日の強風の続きで、今日も風はかなり強い。子供は銀紙に追いつきそうになると、また風に飛ばされて転がって行く。何度も掴み損なっては追ってきて、とうとう浜辺と道路の境の一メートルほどの高さの壁際まで追っかけてやっと銀紙を掴まえた。こどもは、その低い壁を攀じ登って、道路においてあるゴミ箱にぼいと捨てた。あれだけ一生懸命に銀紙を追いかけてきたのは、銀紙が欲しいからではなく、ごみを散らさないために、自分の責任で始末しようということだったのだ。

別に誰に言われたからでもなく、はじけるようにして銀紙を追ってきた子供はまだ学校前だが、ちゃんと環境に対する躰けができています。風に飛ばされたのだから仕方がないというのではなく、最期まで責任を果たそうとしていたのだ。そんな難しいことを考えたわけでもなく、飛ばされたごみを自然に追って行っただけだろう。だが、その様子を見ていると、日本の子供たちの教育は何をしてきたのだろうかと思わないわけにはゆかない。「まち」を美しくするのは、大人が声を張り上げるのではなく、こどものときから、こんな身近なことから始まるのだろう。それが大人の市民になる。

田村明は現実的な人間関係の構築に「市民」という言葉でくくる一種の人間環境概念を提示した。地球人口増を源泉とする都市化は人々の接触回数増が強いられ、その接触にはルールが必要だ、という事だ。彼が考える「市民」とは、自覚、責任、参加など個々に意味合いがあり、しかも互いに関連する概念だが此処で定義して枠に入れただけでは、現状分析に過ぎない。「市民を育てる」という目線が必要であると考えていた。彼は断片的な幾つかの記憶から幼い頃、「暖かな」であった「家庭」と「母親」のイメージが重ね、その母親に潜在的にあると感じていた「力」にその救いを求めたのだと思う。彼の著書、「柿の木なる家」に父親が土地の名前から柿を植えた話を思い出に重ねているが当然、母親のそれでもあった。彼女が青山学院緑岡幼稚園の創立に寄与し、主事として働く喜び、その発展と共に我が家が確保され、4人の子供達もそろそろ手間がかからなくなっていた。さんさんと陽のあたる庭の木々や楽しく語り合える「暖かな家庭」を感じたのは第二次世界大戦前のほんの此の2、3年のことだったのであろう。田村明はその時、そこに母親の源泉を見た。自分の生活を精一杯生きて羽を広げ、一人一人子供たちを抱きしめて心を伝えた。母親が子供達に贈る最高の贈り物だったと思う。

田村明は人生で3回、大きな挫折をした。そこを抜け出す度に新しい自分を発見した。

- 1) 中学3年の時、肺結核と診断され、一年休学、この時点で勉強を見てもらった先生に大きなアドバイスを受け80点主義を会得、勉学が楽しくなったという。復学後、4年で飛び級、旧制静岡高校に進学。
- 2) 斎藤眞生子と結婚、しかし、眞生子は不妊が伝えられ、明は自己実現的な仕事へ情熱をかき立てる。数年後、City Plannerに向かい、横浜市の再建として6大事業に邁進。地方自治体の自立を目的。
- 3) 飛鳥田市長の退任に伴い、窓際族に、6大事業から外され挫折、横浜市を退任後、「まちづくり」へ大学での授業も一つの仕事だが啓蒙的な活動として「東京と横浜の二カ所に塾を開催した」最後に市民政府論発表、これは田村明のユートピアであると思ふ。この市民は上述の通り、彼がとりわけ頻繁に使い出した田村明流の考えでモラルの一つ、より積極性が問われる約束事 (soft law) のように感じる。その意味で私が学んだ自然科学の法則と対比して見るのも一興であろう。

§ § 8からの考察

太陽は東から昇り、西に落ちる。新人類の誕生は20万年前という、人は自然界に起きることにおよそ疑問をもたず、自然界の様々な出来事は神の領域であった。ヨーロッパ文明が科学に目を向けるようになったのが14世紀だという。力学が学問の一つとして確立し、蒸気機関が作られ、酸素や水素が独立した気体であることを発見し

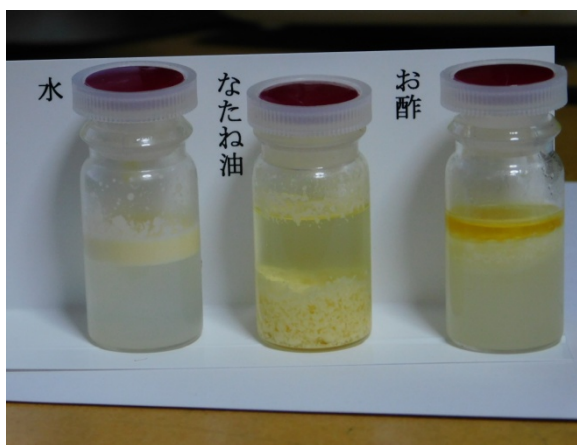
たのは 18 世紀、300 年ほど前である。自分の年齢、88 才から考えると意外なほどに近く感じる。文系の 3 人の兄達と違い化学に興味をもち今に至った。人々の住み家を考えながら実験的な一項をもうけるのも一興であろう。

Analogy、類比と言う言葉がある。ある現象とある現象、サイズは違っても何か同じような状況が見えるような状態である。水と油、両者はまざらない。この現象、仲の悪い人間関係を表現するのに使われて来た。同じ意味で「溶ける」というものもある。「あいつ、メンバーにとけ込んでないな」馴染むと言う意味だ。では或ものは水に溶けないが、油に溶ける、とはどういう事だろう。化学を学んだ人は原子や分子という実体を確認し、「まざらない」理由はそのものの化学構造にあることを突き止めて来たのである。そこには普遍的な法則（原理）がある。「まち」や「ひと」の関係も一つの自然現象かもしれない。マヨネーズを人間の関係になぞらえて考えて

水を過剰にいれると最初、マヨネーズ全体が乳化したゾル状態、白濁する。やがて分離が始まり、水は下層でやや不透明、上層に乳化ゾル状態が続く。白濁部位は良く見ればやや黄色いが全体には薄められて殆ど白色である。マヨネーズに元々あった油性部分はこの白濁部位にいると思われる。色素の黄色は周辺の乱反射で極めて淡い黄色である。

油を過剰にいれるとなかなか均等に混ざらない。油は比重が軽いので上層にいる。卵の黄色色素部位はこの油層に移行、油の量が多いので全体は薄められて淡い黄色になる。卵のタンパク質部位はマヨネーズに元々あった水と共に白濁した部位に居る。

お酢を過剰にいれるとマヨネーズに元々あった油性部分が最初に分離し、しっかりした黄色層が上層にできる。下の層は最初、全体が均一に混ざっているように見えるが可成りの時間をへて乳化ゾル状態の白濁層と半透明な分散型の層に別れ、3層になる。この白濁層はマヨネーズのタンパク質部分であり、お酢より軽いので上の方に集まったモノだろう。



みることにした。マヨネーズは卵、油、お酢を混ぜて作られゾル状態が保たれている。これに水、油、お酢を過剰に入れるとどうなるか、を実験した。卵黄は殆どタンパク質で出来ているが黄色部位は人参の赤色成分と同系のルテインという油の色素である。もともと、マヨネーズの中にあるタンパク質は水と油の間にあつて微妙な距離感を保ち、お酢が両者を馴染ませ、全体が均一で分離しない状態を実現しているのである。しかし、そこに必要以上に水や油、お酢が入ってくると分裂してしまう。言ってみれば環境を整えば分子同士は会話をして状況に応じて自分の位置関係を決めて均質に住み合うがバランスが異なると分裂してしまう。

細胞の油膜内では分子同士の接近、結合、分裂があたかも人の会話のように行われている。それが即ち、生命現象そのものであり、人々が「まち」なかで見かける姿と Analogy と考えても良いのではないだろうか。

§ § 終わりに

田村明の願いは暖かい家庭であった。全ての人の願いでもある。その源泉があつてこそ「市民」は育つ。母親はその担い手、そこに母親ならではの力を感じていた。彼のイメージ造語「母親力」はそこにある。私は、この「市民」という言葉を分析してみたくなった。今回、その一端を紹介する。私の理解する田村明は、横浜市退職後、まちづくりの感覚、自分が経験した地方自治のあり方から派生し、市民という感覚を取り入れ、複合させて思想的な発展を描いた。総じて明は弱者の立場を理解しない人では無かったけれど弱者に寄り添って語れる人ではなかったように思う。因みに、田村義也は極めて実践的だった。弱者に対する共感を得るため、例えば部落問題にたいして身を投じ彼らから理解を得た後（危険な経験を含め）仕事に反映させた。（特殊部落問題）結論はこのテーマは明流の市民論というユートピアの世界を母親力という極めて抽象的な言葉で括ったことは彼一流の一種の美学だろう。最後に私たちの父親にもふれておきたい。§ 1 1) 2) 3) に記した様に彼は青年時代、養母の出奔による親の離婚、養父の叱責からのがれて家庭崩壊という過酷な試練にあつた。訪れた村上キリスト教会で出会った紅松氏による上海行きの実現、たまたま遭遇した事件から母、忠子との出会い。不断の努力があつて後、「暖かな家庭」が実現していった。父親の青年時代を想像するとふっと目頭が熱くなる。